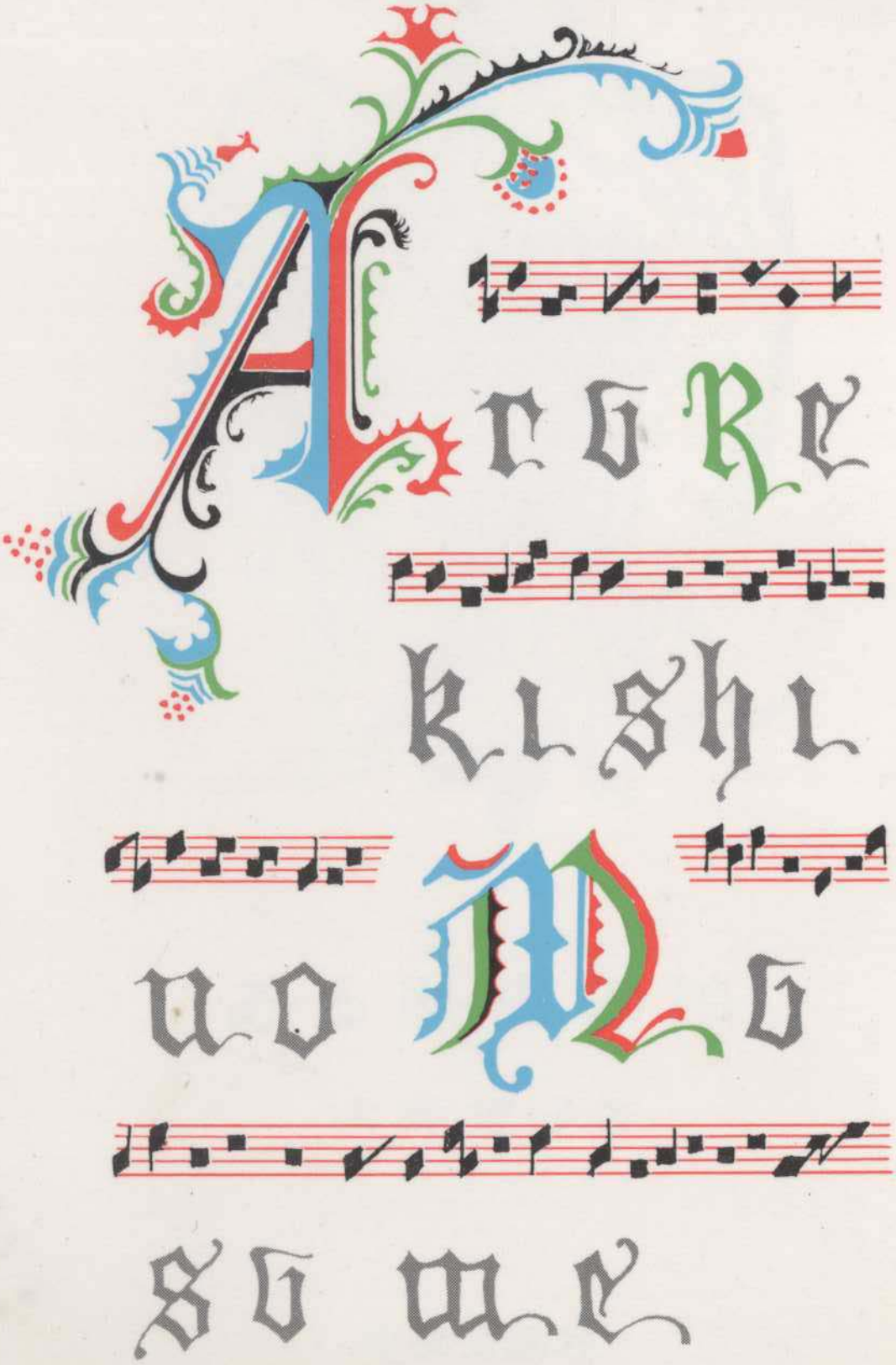
ある歴史の娘

犬養道子



中公文庫

中公文庫 ©1980

ある歴史の娘

一九八〇年一〇月一〇日初版
一九九〇年八月二〇日3版

著者 犬養道子

発行者 嶋中鵬二

整版印刷 三晃印刷
カバー トーブロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
ISBN4-12-200773-9
Printed in Japan

中公文庫

ある歴史の娘

犬養道子著

中央公論社

カット　秋山　正

表紙・扉　白井晟一

目次

北の南の人　7
つゆ冷え　29
問い　51
借翠宝蘭亭斎　71
日記の周辺　91
青い手紙　113
判決　135
夏の客　157
熊と切手　179
楽学（幕間のとき）　201
「七月七日」　223
津田　243

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

青春の嵐 263
長崎の前後 283
和平工作 301
汪さんと言う人 321
揚子江 341
フランス租界 361
夜会服 381
ひとつの林檎 401
ヴィタ・ヌオヴァ 421
あとがき 443

ある歴史の娘

北の南の人

五・一五事件は、言うまでもなく一大社会的事件であった。

同時に、歴史を画(かく)すると言う意味あいに於て、まさに歴史的事件であった。本書の前篇である『花々と星々と』の文庫版解説において、評論家、元朝日新聞学芸部長の扇谷正造氏が左のごとく書かれたのは妥当である。

「……けたたましい号外の鈴の音に驚かされた。手にとると、『犬養首相、兇弾に倒る』コブシ大の活字が目にとびこんで来た。私は思わず（とうとう来たか！）と思った。一瞬、目まいがし（銀座）一帯が灰色一色にぬりつぶされた。……（号外の）一行の中に、我々の世代の青春は抹殺された……」

五・一五の拳銃の音はそのままに、太平洋戦争序幕の音であったから。日本の議会政治敗惨の音であり、軍及び軍と手を握る大企業（当時の言葉での財閥）――たとえば鮎川義介のニッサンコンツェルン等――独走による「狂」の時代の幕開けの音であったから。

とは言え、狙い撃(う)ちにされた当の犬養の家に限っては、事件ののち、一種不思議な――そう、

安堵感と言ってしまっては些か語弊があるが、それにも通じる静けさが訪れたのであった。

勿論、事件は一家全体に取って、めくるめくドラマであったし、めいめいの受け取り方には相違があろうとも、家族ひとりひとりのその後の人生に、永く尾を曳く強烈な個人的体験であった。とくにも、唯一の現場目撃者でありながら「むざむざと（舅木堂を）撃たせてしまった」嫁である母の苦悩は深かった。

しかし、その彼女すらも含めて、一家全員が、安らぎとも解放感ともつかぬ気持を味わうようになったことはたしかである。

来るべきもの――のがれっこないもの――は、来て去って行った。月並な表現を借りれば、嵐のあとの静けさ。

嵐はすさまじく、むごかった。破壊力に満ち溢れていた。しかも、もっと大きな嵐を早晩余波として送って来ることをはっきり示す嵐であった。とは言え、とにかく、去ったのである。

安堵の底にはまた、「お祖父ちゃまはその性格の最も善い面だけを十二分に示し出して、こう死にたいとつねづね念じていた通りに死んだ」と言う、以て瞑すべし賀すべしの爽快感もまじっていた。爽かさを人に味わわせる死と言うものはあるのである。

祖父犬養木堂と言う人の、強烈極まりない個性の中には、白と黒ほどの対照をなす、実にイヤな面と、限りなく美しい面とがないまぜに入っていた。死に際してしかし、彼は柔和さと、劇的な一切を排し淡々たる平常心で天命を受ける大らかさ――つまり彼の美点を出し切った。その意

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

味で彼は幸なる人であった。

女中たちや玄関子の名で呼ばれる多勢の書生や子郎党まで、彼の死に爽快なものを見て取り、あれでよかったと心に思っていたのである。犬養の邸内は、悲哀の中にもいっそ、明るく落ちついたと言ってよい。

実際。昭和六年末の大命降下、内閣組織、官邸への引越の時以来五・一五の日まで「何か起る、何か起る」と待ちつづけた——と言うと奇妙だが——あの重苦しい緊張感と不安感こそ、たれにとってももう、耐えられないものだったのである。

たったひとり。

そういう犬養の家の空気をわかちあいもせず、さりとて五・一五の社会的性格の重大さを見てとりもせず、その事件をわが身ひとつの個人的悲劇とのみ受けとって、黙念と邸の一隅に坐す人がいた。

その人は、お祖父ちゃま生前にも、ほとんどしょっちゅう、そこにいた。私はそれを見て知っていたが、別段の注意を彼に対して払ったことはなかった。

払えと命じられたって、そんなことは無理であった。何しろ、お祖父ちゃまもお祖母ちゃまも、女中頭のテルも女中たちも、十数人時に数十人の玄関子も、「だれもだれだか知らない」全国から連日上京して来たり、毎日「出勤して」やって来る「憲政の神さま（お祖父ちゃまがもらってし

まった別名）」支持者が、正規のこれまたおびただしい数の客に加えて、どこにもかしこにも溢れているような「政治家の家」で、よほどの奇癖でもない限り、「いつも坐っている」ひとりの人をとくに記憶にとどめることは難しかった。

廊下にまで客が溢れっぱなしの、プライバシイなど薬にしたくもない家の、北のベランダと呼ばれた十二畳ばかりの空間にその人はいた。

陽の当らぬ、眺めのごく限られたその一隅を、陽の目のついに当ることなき運命のわが身に最もふさわしい場所とえらび取ったごとくに。私の記憶にのこるあのころの彼は、粉をちょっと吹いた感じの、小豆色を帯びた茶色の背広を着ていた。袖の寸が少しつまってワイシャツの手首が普通以上に多くのぞき、ズボンは布がもはや古いためか、これはおしゃれで身だしなみに人一倍やかましい父の、まるでナイフの刃のような折目のピシャリとついたズボンとはくらべものにならなかった。一語で言えば、その人はつましい生活ぶりを一見、人に告げるていの中肉中背の人であったのである。しかし、つましく貧しく見えても、野卑とか俗とかの気配はみじんもなく、卑屈なところも全くなかった。

背のまっすぐなしかし妙に坐り心地のよいライト式（旧帝国ホテルを設計建築したアメリカの建築家ライト氏のデザインによる）の、「ベランダの椅子」に、足をそろえるでもなく組むでもなく、ゆったりと逆八の字に投げ出して坐る。

あとで考えれば、あの坐り方は、身分高き東洋人の、悠揚迫らざる腰かけ方であったのであ

る……

彼は黒い細縁の眼鏡をかけていた。もはや多くない胡麻塩の頭髪は、いつもきちんと、櫛目分け目を見せて中央から左右にかき上げられていた。眼鏡の奥には、少しく吊り上った、二重瞼の重い眼があり、眼鏡の上には濃く豊かな眉。鼻は筋が通っていたが、その筋肉は厚かった。否、鼻だけでなく、唇も頬も。笑いを忘れた口元には、頑(かたくな)なものがあらわれ、口は表現のためとよりはむしろ閉鎖のためについているようであった。鼻翼は眼と同じく一度吊り上ってから、大きくふくらんで、顔の中央に太い線の影を描き出していた。眉間には深い皺がたてに掘りこまれ、皮膚の色は蒼みをおびた濃い褐色であった。

年のころは、五十一、二歳。ふとした動作や、いや第一に、顔の肉のつき方が、彼が日本人でないことを物語っていた。

北のベランダで彼は何をしていたのか。

時には、開かれた書物が膝の上にあった。

たまにはお祖父ちゃまにねんごろに導かれて、第一応接に入った。五・一五ののちは、父にこれまた丁重に導かれて、「だいじなお客様」の部屋に入った。第一応接に入った日、彼はいつもより快活に早く帰って行った。

一度、いとこたちと鬼ごっこのさいちゅうだったか、入ってはいけないその部屋に、切羽つまって飛びこんだら、父の手から彼の手に、大きな部厚い封筒がちょうど渡されている瞬間だった。

「なんだ、なんだ、あっちだ……」

人を追い払うときの父の口癖が咄嗟に出て、私は反射的に飛び出した――が、子供の心にも二つのことがあざやかにのこされた。ひとつは、渡されたものが金の包みであったこと。もひとつは、金と言うものはもらう方が一応謙りくだるものなのにあの人はあたかも献上品を受ける者の態度で、当りまえのような顔をして、静かに受けとっていたのである……

――ほとんどの場合、彼は、玄関と奥を結ぶ広い通路でもあった北のベランダをしょっちゅう小走りに往来する書生たちや子郎党に、一顧も与えず、うるさがる風も見せず、孤立の雰囲気に包まれてじっと空中のどこかを見ていた。自分がそこに居坐ることが、人に迷惑を与えるかどうか、そんなことはてんから眼中にない、のであった。

時は彼のまわりで停止していた。

五・一五ののち、百ヶ日がすむと急に表面に出て来た玄関近辺や客たちの新旧交替も、彼をベランダから動かすことは出来なかったから。

「若先生をかつぎはするが、何と言ったって若先生は駈け出しじゃて――上京して来るまでもないわ、の……」

古い人々は、「家の子飼の郎党」数人をのこして少しずつ去って行った。護衛の私服ももういらなかったし、第二応接間にべったりいた記者連中は、同じ四ッ谷の坂ひとつ越えた向うの斎藤実総理大臣（五・一五のあと内閣を組織。子爵、海軍大将、一九三五年内大臣、二・二六事件で暗殺さる）

のお宅や、外苑の森のかなたの高橋是清翁（犬養内閣・斎藤内閣・岡田内閣蔵相、二・二六事件で暗殺さる）邸に陣を移したようであった。

だが――彼だけは相変らず物思う眼つきをしてそこにいた……いま思うと、彼はどこでいったいごはんを食べたのだろう。家族の食事に彼は招かれたためしはなかった。母は気がるに人を招く人なのに。

「ねえママ、あの人、だれよ、あの北のベランダの茶色の人……」

母にそうたずねたのはいつごろであったろう。五・一五の前であったようにも思われる。

「どなた、とおっしゃい」

と母は私をチラと見て言った。

どなたは敬語である。あ、あの人はやっぱり曰くづきの人なのだ――好奇心が波のように昂まって、

「ねえママ、どなたよ」

母は私のその好奇心をちょっと焦らすように持ってまわって、

「南さん……」

南と言う姓の存在することを私はとっくに知っていた。

母の父である――つまり私にとっての母方のお祖父ちゃま――日本胃腸病学先達・泰斗のドク

トル・メディッィーネ故長与称吉の一の弟子は、昭和中期ごろまで押しも押されぬ「日本一」であった胃腸病院院長の南大曹博士であったから、彼の来診を乞うことも多かったし、その病院に「遊びに」行くことも屢々であったのである。

「ふうん――ミ、ナ、ミ……」

私はつぶやきながら、築地のあの最新的な病院の南先生の「南」と、あの茶色の人の「南」の間には、何か大変なちがいがあるように直感した。私は勘の早い子であった。

母の、笑いを含んで面白がって私を見ている眼に会うと私は訊ねた。

「南の国の人――じゃあなかった、方だから？」

「お蔵に火がついた」と彼女は笑った。それは「かくしておいたことがバレた」と言う意味で、彼女が時々使う文句なのであった。

「道ちゃん、あの方はね――学校なんかで言っちゃ駄目よ、黙っているのよ、ほんとに、よ」

念を、これはまじめに押してから、

「安南の王様。亡命の最後の王様……」

安南は越南の国、つまり、いまのヴェトナムのことである。

素姓を知ってのち、私は彼をまじまじと観察し、茶などを持って近づいて見た。彼は決して自分から人に話しかけるたちではなかった。いや、話などと言うものではない、彼の全存在は閉じられた井戸のように――と、私は感じた――深く暗い底を抱いたまま黙していた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com